第１９８号

芥川だより

発行日＊２０２３年７月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

もうすぐ　２００号　ありがとう‼

皆さんのご支援・ご協力を頂き大きな目標である２００号が目前になってきました。ありがとうございます。ひとえに皆様のおかげと感謝しております。

吉田てる子さんと始めた「芥川だより」がこれほど続くとはゆめゆめ想像しませんでした。軽い気持ちで始めた小さな冊子がこれほど続いたことは奇跡のようなことではありますが、決して奇跡ではありません。

若い時の友人とは有難いもので、幾たびかの廃刊の危機を友人たちは救ってくれました。もう忘れかけてた友人たちさえ救いの手を差し伸べてくれました。中には名前さえおぼえていない人もありました。友人たちに、とにかく紙面を埋める原稿が欲しい。オリジナルな原稿を何とか書いてくれとお願いした。

「高瀬川セツルの同窓会」の知らせを友人から聞き、退院して間もない私は、活動期間も３ヶ月ほどで会に出る資格はなかったかもしれないが、迷うことなく参加し精神科医をしている彼にお願いすることにした。

４０年ぶりだから、私の事を覚えている人も少ないだろうが、私は勇気を出して挑戦した。６０名近い参加者の中で私の事を知っている人はほとんどいない。しかし、原稿を書いてくれそうな人は幾人もいそうだ。

司会者から指名を受けた時、「芥川だより」の原稿を精神科医の彼に書いてもらうために、私は来ました。性急な願いかとは思いますが、何とか希望を聞いて欲しい。と大きな声で言いました。彼は、穏やかな表情で私の話を聞いていました。

会が終わりかけた頃に彼の所に行き原稿の話を必死ですると、彼から意外な返事がありました。「書いてもいいよ。後日メールで打ち合わせを」。嬉しい返事をもらい、これで「芥川だより」が続けられると確信した。さらに幾人か好意的な人がいた。その時の関係者から６人が原稿を書き続けてくれて現在に至っております。有難いことです。

死をめぐるあれやこれ（１０４）　石川　吾郎

国難・南海トラフ巨大地震の対策

最近地震が異様に多い。そこで思い出すのは南海トラフ巨大地震。これは皆さんもご存じだろう。今後三十年以内に発生する確率は七十から八十パーセントと言われる。阪神淡路大震災は発生する確率が五パーセントと言われて起こった。歴史上では文字記録に残っているだけで九十年から二六〇年を周期として、西暦八八七年から巨大地震が七回起こっている。このうち三回は二回がセットで起こっているので、合計で十回の巨大地震が起こっている。◆一回だけで起こるものは、Ｍ９の規模の超巨大地震であり（これを全割れという）、二回セットで起こるもの（これを半割れという）はＭ８の巨大地震である。どちらにしても、静岡県から宮崎県の太平洋側は最強の震度７の揺れにみまわれ、東日本大震災と同様かそれ以上の大津波が襲うのが確実とされている。しかも震源に近い静岡や和歌山などでは、地震発生の二・三分以内に津波が到達してしまう地域もあるという恐ろしいものだ。◆半割れの場合は、必ずはじめは静岡・愛知沖を震源とする東海地震であり、その後に紀伊半島から四国沖を震源とする南海地震が続く。前回は一九四四年と四六年であった。前々回は一八五四年の安政年間で、この時は三十時間を隔てて二回の巨大地震が連続した。またその前一七〇七年の宝永大地震は、日本史上最大級の地震（全割れであった）で、その四九日後には、

有名な富士山の宝永噴火が起こり江戸にも火山灰が降り積もった。◆この巨大地震が現在起これば、犠牲者は三十万人を超すとも言われている。被災地はわが国の中枢をなす地域で、首都圏の機能の麻痺と流通の麻痺を起こすのは明らかで、被害は東日本大震災の比ではない。国家的対策としてのインフラの強化や強靭化の事業が必須だ。しかし政府は危機を予想はするが、一向に本格対策に乗り出していない。近い将来必ず起こり国難となる大災害に対して、本格的な防災対策にとりかからないということは、政府がこの国を守ろうとしていないに等しい。この巨大地震に対して国家事業として巨大予算を組む国難対策政府を作るのは今しかないだろう。次の総選挙にはこのことを忘れてはいけない。◆なお気象庁のホームページに想定される震度の規模や津波の高さ、想定の被害などシミュレーションが出ているので、ぜひチェックされることをおすすめする。

芥川だより一九八号　目次

		ページ
巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム104	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　１１２	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談62	祖蔵哲	3
大峰奥駆道68	下村嘉明	5
新型コロナウイルス愚考その33	明石幸次郎	5
オクラの山たより82	因了生	6
隠された歴史57	満田正賢	10
道を行く　四一	成瀬和之	12
俳句	影山武司	15
編集後記	ＳＫ生	15
ふみの道草61	山椒魚	16

素老人☆よもだ帳（１１２）

坂本 一光

◆戦争になったらよりもなる前に

沖縄慰霊の日・六月二十三日、今年も沖縄全戦没者追悼式が行われ、玉城デニー沖縄県知事が平和宣言をした。その要旨。

①七十八年前、沖縄で一般住民を巻き込んだ悲惨な地上戦が繰り広げられ、島の自然と文化遺産を破壊し二十万余の命を奪ったこと

②二十七年に及ぶ米国統治後、一九七二年の復帰から五十一年、在日米軍専用軍事施設面積の７０・３％が集中し県民の暮らしを破壊していること

③昨年十二月閣議決定の安保関連３文書には沖縄の防衛力強化が強調され、県民に大きな不安を生じさせていること

④平和を構築するための様々な行動に県及び県民が取り組み、平和を願う輪が広がっていること

⑤平和を希求する「沖縄のこころ」を世界に発信するとともに、沖縄がアジア太平洋地域の国々との架け橋「万国の津梁（しんりょう）」となることを目指すこと

⑥「沖縄のこころ・チムグクル」には、人間の尊厳を何よりも重く見る「人間の安全保障」が含まれ、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立に向け絶え間ない努力を続けること

岸田首相のあいさつもあったが、その言葉はただただ、「右の耳から左の耳へと通り過ぎる」だけのものであったと言うほかなかった。「御霊に謹んで哀悼の誠をささげ、…　戦争の惨禍を二度と繰り返さないという強い決意の下、静かにこうべを垂れたい」と言うが、彼の心は異次元の大軍拡をどうするかで一杯なのだろう。いつものとおり、「我が国を取り巻く安全保障環境は、選後最も厳しく、複雑な状況にある…」で締めくくられた。彼の言葉どおりであればなおさら、戦争の準備ではなく、平和の準備をすべきである。そうした決意を述べたのは今年もまた首相ではなく、子どもたちから寄せられた「平和の詩」であった。

今、平和は問いかける

開成国際高３年　平安　名秋

夏六月
溶けかけたアイスを手に走り出す
緑萌ゆるこの島の昼下がり
礎に刻まれた「兄」に
まるであの日のように
そっと触れるおばぁの涙は
陽炎が登る摩文仁の丘に
ただ果てしなく広がっていく
その涙は体を包み込み
私を「あの日」へといざなう
限りないこの空は
何を覚えているのだろう
涙に満ちたおばぁの瞳は
何を語りかけているのだろう
七十八年前の
あの日

あの時
かけがえのない
たったひとつの命が
憎しみと悲しみの中で
散っていった

名も無き赤子の
微かな
微かな泣き声は
震える母の手によって
冷たく光の無いガマの中で
儚く消えていった

幾多もの砲弾が
紺碧の海を黒く染める鉄の嵐となって
この島に降り注いだ

戦争が起きる前
そこには日常があった

私たちと同じように
原っぱを駆け回り
友達とおしゃべりをする
みんなで暖かいご飯を食べ

時には泣き
ときには笑い
時には「ありがとう」を伝える

そんな今と変わらない日常が
平和が
そこにはあった

平和は不確かで
脆く崩れやすい

いつもすぐそばにあるのに
いつのまにか消えていく

おばぁの涙は
摩文仁の丘に永遠（とわ）に灯る平和の
火は

今、私達に問いかける

平和とは何かを
私達に出来ることは何かを

私は過去から学び
そして未来へと語り継いでいきたい
おばぁの涙を
沖縄の想いを

かけがえのない人たちを
決して失いたくはないから

今日も時は過ぎていく
いつもと変わらずに

先人達が紡いできた平和を
次は私達が紡いでいこう

そして世界に届けていきたい
平和を創り
守っていく
この沖縄の「チムグクル」を

（かたちは心であり、心はかたちになる■
大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（６２）

祖蔵　哲

「無知の哲学」

ウクライナの戦況は日々変化してきている。西側の全面的な支援体制で反転攻勢をもくろむなか、６月の初旬南部ヘルソン州のロシア占領地域の水力発電所のダムが決壊し大被害が出た。これを巡ってロシアとウクライナ双方が非難の応酬を繰り広げていた。そして月末になると、なんとロシアの民間軍事会社「ワグネル」が反乱を起こしモスクワに向けて武装蜂起したという。結果的には避けられたがなんとも複雑な様相である。ウクライナ、ロシアともに政権を握る権力とそれを支える軍部の二重、三重構造があり、その一つのバランスが崩れると急激な政策変化をもたらす。さらにロシアのように専制国家となると権力者が私兵軍を持つ。かつてのナチス親衛隊のように。しかし、今回はその私兵に「飼い犬に手を噛まれる」ように裏切られたということになろうか。戦争が長期化することにより、まず内部が崩壊し、それが外部に波及し、最初に勝者であったものが敗北する。これが歴史の繰り返しであろう。

そして７月初旬、北アフリカ系の少年が交通検問中に警察に射殺され、フランス全土での抗議運動が広がり、各地で暴動が起きている。人種差別といえばアメリカばかりが注目されるがヨーロッパでも潜在的には変わらない状況である。そんな中、米最高裁はハーバート大学などでの大学入試の人種配慮は「違憲」という判決を出した。米大学は黒人の機会均等を配慮すべく人種で入学枠を担保する積極的差別是正措置いわゆる「アファーマティブ・アクション」を行ってきたが、近年ではアジア系や白人に対する逆差別になっていると指摘する声あった。いわゆる逆差別が起きているという理由である。しかし、この人種差別には長い歴史があり、その実態は「知らされていなかった」し、われわれ暗黙の加害者は「知ろう」としなかった。この事実は欧米だけではない、日本も同様である。人種差別以外でも、最近起きた芸能事務所アイドルの性加害問題において、長期にわたってマスコミも「知っ」報道しなかった。今月はこの「知る」を哲学してみよう。

（1）ソクラテス「無知の知」

「知らない」ということを哲学の中心にしたのは BC５世紀のソクラテスである。人間の知の限界を問題にしたのはソクラテス以前の哲学者も多くいた。その一人パルメニデスは人間が知るのは真理の知ではなく「思い込み（ドクサ）」に過ぎないと論じた。そんな中でソフィストのプロタゴラスは人間が万物の尺度であるといって「知」を逆転させた。このよ

うな時代のなかでのソクラテスのこの言葉である。しかし、ソクラテスは論議に勝つためにすべてに対して「無知」を装っているのではない。ソクラテスが知らないといっているのは単なる事実ではなく、「善、美、正義」など人間の倫理や価値をめぐる「知」についてであり、それが「何であるか」を問い続けるものであった。この点でソクラテスは単なる懐疑論者ではない。

「知らない」つまり「知る」の否定は「無知」のほかに「不知」もある。ギリシア語では「不知」は「ア・グノイア（認識）」、「無知」は「ア・マティア（学び理解）」である。「ア」は否定語である。真理を「知らない」ということは「ア・グノイア」（不知）であり、神でない私たちがすべて被っている状態である。しかし、この「不知」の状態でそれを自覚しないもの、つまり「悪くなってしまっている者たち」は最悪の「無知」の状態にあると言える。また、「知る」ということは単に「そう思う」とか「そう聞いている」「そう信じている」という事柄でもない。

「不知」とは「知らない」という意味であり、「無知」は「知らないのに知っている」と思っている状態のことである。その意味でソクラテスは「不知」を知っているのであり本来は『不知の知』と表現されるべきだ。

よって、ソクラテスの『無知の知』とされるものは「不知」つまり知らないにもかかわらず哲学的な「愛知」（知を愛する）に対立する「知っていると思いこんでいる」「無知」を自覚へと導く『不知の知』であると言える

（2）無知学とは

ソクラテスが問題にした「不知」、つまり、人間は「知らないこと」をいかに知るようになれるのかは、「神の死」を経験した中世以後盛んに議論された。しかし、神に代わり「科学」がかつてのその位置を占めてきた近代以後、学問の方向は神に代わる科学によって作られる「無知」に向けられている。それが「無知学」である。

無知学（アグノトロジ）とは、「無知」がいかに作られてきたものであるかという観点に立って歴史や現在を批判的に研究する学問である。そこでは、誰が、何のために、どのようにといった5WIHで問われる。社会、文化、歴史的観点から「知識」を扱う。

無知学の用語の創始者のひとり科学史家ロバート・N・プロクターはより一般的な定義として、ある事についての知識が増えることにより、かえって真相が分からなくなったり、元の知識に疑念を持つようになる事象や状態について光をあてた用語であると言っている。

そう言えば、私たちが日常頻繁に使うようになっているインターネットは利益団体にとって都合のよい無知を広めるのを助けている。誘導された知識によって真実が隠され、私たちは「無知」に慣らされているのだと改めて実感する

また歴史的には、「植民地主義」はこの「無知」を利用してきた。つまり、アメリカ大陸やアフリカ大陸は現地のひとは昔から住んでいるのに、西欧人からは「未知の土地」として故意に社会的な「無知」を作り出し、容易に搾取を可能にしていたのである。

（3）無知の無知

近代的な防災対策が進んだおかげで災害はなくなるはずである。しかし、それは逆である。強固な防災構造物が構築されればされるほど、逆にそれを超えるパワーの災害が発生すれば被害は大きくなる。いわゆる「想定外」である。本来であれば、そんな危険な場所の原子力発電建設は避けるべきであったものが、強固な防波堤を作ったおかげで、大規模津波が来るまで誰も小さな危険を知らなかった（無知）のである。防災に関連したこうした逆説は専門的な防災体制が整備されればされるほど住民側の防災知や経験知が薄れ、リスクがかえって増大するというのにも当てはまる。「無知の無知」とは「知れば知るほど、知らないことがあることをますます知らなくなる」ということである。

（4）作られる「無知」

人間は生まれた状態から「知」を持っているわけではない。そういう意味で「無知」は生来のニュートラルな状態であるといえる。この状態はむしろ「良い無知」である。なぜなら「知ろう」という意欲の源になり有用性をもっている。これを契機に人間は知る活動を始めるのであるが現代社会はそれを「無知」のままに戻そうする。

現代は情報過多であるともいわれる。様々なメディアを通じて情報が流され、我々はどれを選ぶのかを迫られる。決断に迫られ、ある物を選択するということは他のものを切り捨てるということである。切り捨てられたものは「無知」の状態になる。しかし決断は確かに自分自身で行ったのであるから自分の意志であり責任である。このように無意識的に作られる無知は「受動的構成無知」とばれる。そして次に、社会が自然に無知を生み出すならこれを意図的に作り出すことができるだろうと「戦略的」に考える者が現れる。これが「意図性を持つ積極的構成無知」である。こうして「無知」は歴史的に欠如から資源へ、生来のものから構成されたものへ、意図しないものから意図的なものへのその見方を転換させてきた。よって無知学は意図性（誰が）と構築性（どのように）の分析をおこない、無知の有用性を考察する場合はそれによる不利益を被る者をあぶり出す。

（5）無知社会

現代は地球歴史的に「人新生」と呼ばれることがある。人間が作り出した科学が地球の自然を変えてしまうことである。これこそが人間にとって「無知」であった。しかし、人間はそれが破滅につながると理解していても「無知」を装って開発を止めないできた。かつての公害問題、そして地球環境問題、されには食品の発がん性問題や遺伝子組み換えなど科学は目の前の危機に対して常に偽りの安心を与えてきた。「科学的に考える」という言葉は一見中立的に聞こえるが、しかし、これは「こちら側」の見解に従えという命令でもある。現在調査が行われている福島第一原子力発電所の「処理水」の海洋放出計画について、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）は「国際的な安全基準に合致している」として妥当性を認める包括報告書を公表した。人や環境に与える影響については「無視できるレベル」と評価としている。しかし、そもそも、このIAEA自体が中立を装っているが、実態は原発推進のための国際組織であり関連企業の後押しで成り立っている組織である。ここでも「無知」は作り出されているのである。

（6）「知」の役割分離とその媒介者

問題は「知」自体の在り方にある。純粋な科学「理論の知」とそれを実践する「技術の知」を分けるべきであるがこれが現在一体となっている。そしてそれをつなぐものが必要である。それが「哲学」であり「倫理」というものであろうか。例えば、遺伝子治療の問題などはこれが必要とされる。さらには何を知るべきなのかに対して公平性が求められることである。ある権力が恣意的に知の方向を決めると、切り落とされた部分は「無知」になり、権力をもたない者は「受動的構成無知」の状態になり不利益に気付かなくなる。

現在の日本で起きているいわゆる「学術会議問題」など権力が「知」を支配しようとしている。権力はつねに「無知社会」を作り出そうとしているのである。

さて、今月は「無知」を哲学してきた。私たちは気が付かないうちに「無知」の状況に置かれている。例えば人種やジェンダーの問題。科学者といえば男性、白人という思い込み。これまでの社会はこれらの者が優位に置く社会秩序を正当化するために「知」を利用してきた。これからの社会は「隠された無知」を暴き、「無知」を有益にする社会に変化していかなければならないだろう。

大峯奥駈道（６８）

下村　嘉明

体験型人間学　１８

初めて一緒に仕事をした警備員は、話好きでいろいろと話してくれた。

彼は、７０代半ばで警備歴は、二年余りである。コロナが流行るまでは、大手都市銀行の関西地区の単身者専用の寮を夫婦で管理人をしていた。およそ２０年余りしていたそうで定年もなく暮らしていたが、コロナが流行りだして銀行の方針が変わり寮が廃止されることになり失業し警備員になった。

関西地区の単身者は、６０名ぐらいで広い個室が与えられ恵まれていたそうで、支店長なども多くいた。人事異動により同じ人が３度も出入りし、最後は支店長になってきた人もあったという。多くの銀行員を長年にわたり見続けた彼が言うには、銀行員は永くやるもんじゃない。数字ばかりを寝言でも言うようになるから。彼らが生きてる世界は数字で考えているから日々数字が頭から離れないのだ。

寮を退職する時、相当蓄財が出来たのではと聞くと、孫と子供に使い貯蓄は無く働かなければいけなかったと言う。その彼が、初めて電気代やガス代などが高いかを知ったという。これまで寮で暮らしていて全てが銀行持ちだったから分からなかった。彼と似たように、寮の管理人をしていた同僚が一人いた。コロナは会社の寮をも潰してしまったのか。

コロナの被害は、意外と底が深いと改めて思った。

新型コロナウイルス禍愚考（その３３）

明石　幸次郎

「高齢者の悩み」

人はいくつになっても、生きている限り何等かの悩みを抱えているものです。我々のような高齢者になれば、健康の事、コロナ感染、体力、知力の衰え、伴侶に死なれ一人になったらどうする、年金等の経済的な問題、先祖の墓、実家をどうするとか、子供、孫の将来、将又、気候変動、ウクライナ戦争の行方等々の心配事、悩み事は大なり小なり多く抱えて生きています。これらの悩みは、自分の努力などで解決出来るものと出来ないものとがあり、この選別が大事で、出来ないものは流れに任すとか、誰かに頼る、任

すとか、自分の気持ちを切り替えて深く考えて悩まないことが、残り少ない生きる時間を楽しく過ごすことが良き人生を送る知恵だと思います。

先日、電話相談で６０歳代と思しき女性から「誰にも言えない悩みを抱えて苦しんでいます。家族にも言えず、友達にも言えず一人で悩むしかどうしようもないんです。」と沈んだ声で一人ごとのように呟かれました。どうも具体的には言いたく無いようなので、暫く沈黙して、敢えて掛け手からの言葉を待ちました。

「どうしょうもないことを言っても仕方がないことですが――――」と言われたので「そうですか。言いたくなければ言われなくても良いですが、その悩みは何時ごろからなんですか？」「もう、半年位前からです」「ええ、半年も前からずっと一人でその悩みを抱えておられる！それは、大変つらいことですね」「そうです。友達から携帯に電話が掛かって来ても話したくないので電話に出ませし、こちらからも掛けません」「そうですか、どなたか家族の方と同居されておられたら、貴女がそんなに落ち込まれていたら、心配されるのでは？」「はい、主人は余り私の悩みなど感じていないみたいです」「そうですか、しかし、長くご一緒されていたら、貴女がそんなに長く落ち込んでおられたら、どうかしたのかときっと心の中では心配されておられるんじゃないですか！敢えて貴女から話されるまで待っておられるのかも知れませんよ」と返したらやっと重い口を開き「実は、半年前に娘が子供を産みました。その子供が私の顔によく似てると家族やら、姉からも言われました。それがショックで、もうこの孫に何と悪いことをしてしまったのかと悩み、ずっと誰にも言えず苦しんでいます」私が想像していた悩み（万引きとか、過失事故を起こす等）とは全然違う悩みであったこともあり、内心は何でそんな容貌が似てると言うことで悩まれるのか、若い時からずっと自分の容貌のことでこの人は悩んでこられたのか？　少し驚き、それよりも健康で五体満足で生まれて来た孫を心から祝福出来ないこの人の悩みに共感出来ず、返す言葉が中々出て来ませんでした。

「こんなことを話をしてもどうすることも出来ませんが」と言われたので、

「どうしょうもないと言う辛さ、悩みは貴女だけが感じておられるだけですか？ご主人、娘さん、姉さん、皆さんは新しい生が誕生して喜んで居られるのでしょう！貴女と似たと言って貴女みたいに皆さんは、悲しんでおられますか？」

「それは、ないですが」「そうですよね。貴女が気にするほど、周りの人は貴女の容貌などは、気に掛けてないものですよ。誰でも人は何等かのコンプレックスを持ってますが、外観的なものはその人の努力でどうなるものでもないですし、人格を磨く努力をすれば、どことなく品格が出て来て人間としての魅力が出てくるものですね」「そうですか？」「余計なお話かもしれませんが、私がいた会社の親しい先輩が大学生の時分に既に髪の毛が薄かったらしく、母親があんたのお父さんに似てしまったので仕方がないわと笑いながら見舞金やと言って１００万円貰ったとのことで、その金で育毛せず、遊びに使って色々な経験させてもらったと言ってました」「へー、面白いお母さんですね」「本人もユニークな人ですが、何かしんどいことがあっても明るく振る舞うことが、大事だと母親を通じ学んだとこの人はよく言ってましたし、髪の毛が薄いことも仕方がないと何も気にもしてませんでした。周りもそうでしたね。この度、お孫さんがお出来になって目出度いことなのに、お祖母さんが沈んでいたら、お孫さんが可哀そうではないですか？」「うーん。そうですね」「そうですよ。明るく振る舞って下さいよ！限られた時間しか残されていないのに、失礼ですがそんな事で悩んでいる時間はないですよ。もっと自分が好きなことにその時間を使わないと損ですよ」と話したら声のトーンが明るくなり二言、三言雑談をして最後に「好きなことを見つけてそれに時間を使います有難うございました」で電話は終了しました。

今の我々のような年寄り世代は、有難いことに仕事から解放されれば、どう使ってよい有り余る時間が出来、昔ならば悩まなくてもよいことを悩んでしまったり、悩みを色々見つけて悩みその為に時間を費やしてしまっていることもあります。出来るならば、自分のため、世のため、人のため、悩まずに良き時間を費やしたいものです。

オクラの山たより（８２）

困了生

一

一八二七（文政十）年六十五歳の時に一茶は次の句を詠んでいます。

耕ずして喰ひ、織らずして着るていたらく、今まで罰のあたらぬもふしぎ也

① 花の影　寝まじ未来が　恐ろしき

句意は「桜の花咲く下では眠るまい。未来の死後の世界が恐ろしから」となります。もちろん「花の影」は西行の「願はくは花の下（もと）にて春死なむその如月の望月の頃」という歌を踏まえた言葉ですが、死にたいと言った西行とは違う。桜の下で寝てしまうと死んでしまうから、農作業には携わらない罰当たりな自

分だけど、それはいやだ、死にたくはない、という一茶の生への執着心がうかがえる句です。

しかし、まだ死にたくはない、と強く考えていた一茶ですが、この年の十一月十九日に三度目に中風に襲われて死を迎えることになります。三人目の妻であったやを（1795～1868）のお腹には一茶の血統を後世に伝えた唯一の子供やた（1828～1873）がいました。

こうした内容以上に①の句で興味あるのは前書きです。死への恐怖は理解できますが、「耕ずして喰ひ、織らずして着るていたらく」と自分の田畑を持ちながら耕作もせず俳諧に専念している自分を自虐的にとらえている点が目を引きます。実は、生産者農民から離脱してしまった自分を卑下するこのような気持ちを一茶が持ちはじめたのはずいぶん若いころからで一茶は三十代半ばでした。

② もたいなや昼寝して聞く田植え歌

一七九五（寛政七）年

③ 耕さぬ罪もいくばく年の暮れ

一八〇五（文化二）年

④ 穀（こく）つぶし桜の下に暮らしけり

一八〇六（文化三）年

などの句がそれにあたりますが、これらはいずれも一茶が三十代半ばから四十代前半に詠んだ句です。なんとか俳諧師として独り立ちできたころになっても心のどこかでわだかまるものがあったようです。それどころか俳諧師になったのを悔いているような次の句もあります。これも一茶四十一歳の句です。

越の立山にて

⑤ はいかいの地獄のそこが閑古鳥

一八〇三（享和三）年

「閑古鳥」とは「郭公（カッコウ）」の古名です。寂しげに鳴くとされ「閑古鳥が鳴く」という慣用句もあり、この世とあの世を行き交う鳥ともされています。⑤の句は前書きによれば越中（富山県）の立山で詠んだ句です。しかし、実際に越中で詠んだわけではなく「立山曼荼羅」に描かれた地獄の責めの絵を見ての作だろうといわれています。地獄絵を目前にしていると血の池地獄や焦熱地獄とならんで俳諧地獄もあるような気に一茶はなってきます。「俳諧の地獄は、そこにあるのか、答えてくれ。閑古鳥」という内容の句ですが、「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」と詠んだ芭蕉と違って自分は俳諧の地獄を見ることになったという悔恨の思いもあるような句です。

このころの一茶は、貧乏暮らしはさほど苦にはならないが働き盛りといえる人間が俳句などを毎日詠んで暮らしていてよいものか、ということをくり返し自問自答していたに違いありません。そういったことからでしょうか、田植え唄を耳にしたり鍬をとる農民の姿を見たりすると一茶はつい次のような句を詠んでしまうのです。

作らずして食ひ、織らずして着る身の程の、行く先おそろしく

⑥ 鍬の罰思ひつく夜や雁の鳴く

一八〇七（文化四）年

⑦ 今までは罰も当らず昼寝蚊屋

一八一九（文政二）年

これらの句には一茶の深い罪悪感が漂っています。そして⑥の句の前書きは冒頭の①の句の前書きとほぼ同じ内容です。このことは一茶が「不耕」の民であるということに対する劣等感を俳人として活躍する一方でずっとにわたって持ち続けていたことを物語っています。では、なぜ一茶は自分が「不耕の民」だというコンプレックスを持ち続けたのでしょうか。一茶が北信濃生まれの農民の出身だったからか、いや、俳諧師というと聞こえはいいが実のところは不安定な生活を送るルンペンに等しい人間であることを恥じていたからか。いや、それとも他に何かあったのか。このあたりの事情を検討していこうと思います。

二

一茶の抱えていた「不耕の民」というコンプレックスを見ていく上で次の句は一つの手がかりになります。

遊民遊民とかしこき人に叱れても今さらせんすべなく

⑧ 又ことし娑婆塞（ふさぎ）ぞよ　草の家

一八〇六（文化三）年

「遊民遊民」と一茶を叱った「かしこき人」は俳人で江戸浅草の札差であり一茶の庇護者でもあった夏目成美だとされています。「遊民」とはもちろん「遊び人」のことで定職を持たず遊び暮らしている人のことです。ただし、化政文化の頃に活躍した滝沢馬琴や十返舎一九も同時代の人から「遊民」といわれていますから当時の文人たち一般に対しても使われている言葉でした。だから、一茶自身は「叱られた」と思っていますが、夏目成美はほんの少しからかっただけだったかも知れません。「娑婆塞」は「役に立たない邪魔者。ごくつぶし」という意味です。「嫁ごに飽かるる身となり、一日（元旦のこと）も娑婆塞」（「西鶴織留」巻二）の用例のように、肉親からも見放された人という意味もあります。故郷を出てから三十年ほどがたち、父の死からもすでに五年がすぎて一茶の気持ちとしては「故郷や肉親からも見放され、生きていても役立たずの自分だ。何を今さら」と自嘲的ながらも居直ったような句です。当時は「ぶらぶらしていて、人からの貰いもの

で食っているお前のような俳諧師は、遊民というものだよ。この世の一隅を占領している穀つぶし。つまりは邪魔者さ」という世の風潮がありました。ですから、一茶が農業従事者に対して持った異常ともいえるこだわり・コンプレックスは、当時の世に支配的であったイデオロギー、中でも農政の思想を中心とした「遊民」への批判から形づくられたとのではないかと、考えられます。

ここで注目すべきは①の句の前書きにある「作らずして食ひ、織らずして着る」という言葉です。これは自らを「遊民」と認識した一茶の言葉ですが、この言葉はもちろん一茶の独創というわけではありません。一茶研究者によれば、この言葉は江戸時代では多くの儒学者たちが語ってきた言葉なのでした。二、三の例を示します。

（武士・町人が食事に際して万人の辛苦に対する念が欠如していると　言ったのに続いて）いはんや富貴の遊民、耕さずして食ひ、織らずして着るともがら、衣食の奢を尽くせること、子孫の冥罰恐れざらんや。

一七三一（享保十六）刊　西川如見「百姓嚢」

「富貴の遊民」の生活をあらわす言葉として「耕さずして食ひ、織らずして着るともがら」という表現が使われていることは注目すべきでしょう。また、水戸藩士高橋昌碩が一七九九（寛政十一）年に刊行した「富強六略」には次の言葉があります。

遊民と申すは商人などの類にて、耕せずして食らひ、織らずして着る者の儀に御座候ふ。…中略…男子は耕に就き、女子は織をはげむ様に相成り申さず候ふては、上下の困窮取り直しかね申すべく候ふ。およそ一家の内にても耕作織縫も知らぬ懶惰の者ども大勢扶持仕り候ふては、勝手向き取り直し候ふ儀けっして行き届き申さず物に候ふ。

「取り直し」とは窮状を救い回復させていくことでしょう。「遊民」とは「耕せずして食らひ、織らずして着る者」であるとさらに明確に特色づけた説明をしています。さらに一茶と同時代人である著者が刊行した「世事見聞録」（一八一六（文化十三）年の自序がある）も紹介します。

（農民を苦しめ商人を優遇したために）国民だんだん衰微に及び、町人遊民の道のみ、おいおい繁昌に及び、世上の人数の過半は町人遊民となりて織らず耕さず勤めずして、莫大の米穀諸産を費やして、ほしいままに遊食する事になれり。

徳川の世になってから商人が優遇されて、町人や遊民が繁栄し、さらには、食糧事情を悪化させていると幕府の政策を批判するのに語の順序は逆ですが「織らず耕さず」の言葉が使われています。

以上、これらの例から一茶以外にも一茶と同時代の知識人たちが「遊民」を「耕せずして食らひ、織らずして着る者」、つまり非生産者的な階層の人間であると表現していたことがわかります。当時の一般的な言い方であったのでしょう。

そうだとすれば農業生産にいっさい関わっていないことを日ごろから気に病んで「遊民」のごとき生活をしていた一茶が「耕せずして食ひ、織らずして着る」という言葉を知って、まさしく「これは自分のことを言い表す言葉だ」と脳裏に焼き付けてしまったといってもいいでしょう。

三

ところで近世の文人・知識人の教養・知識の源泉の大部分は中国の古典です。いま話題にしている「耕せずして食ひ、織らずして着る」という言葉は何という中国の古典から出てきたものでしょうか。これは多くの研究者の意見が一致しています。古代中国の思想家の書である「荘子」です。「荘子」の雑篇の盗跖二十九に次の言葉があります。口語訳は遠藤哲夫氏によります。

（孔子は）多辞謬説、不耕而食、不織而衣、揺唇鼓舌、擅生是非、以迷天下之主。…中略…妄作孝悌、而傲倖於封侯富貴者也。

（孔子はべらべらとくだらぬことをしゃべり、田も耕さずに食い、織物も織らないで着物を着、唇を動かし舌を鳴らして、自分勝手に判断を下し、それによって天下の君主を迷わせている。…中略…みだりに孝とか悌とかの道を説いているが、これはあわよくば諸侯に取り立てられて富貴の身分になりたいとあてこんでいるのだ。）

これは孔子が大盗賊の盗跖を諫めに行ったときに盗跖が語った孔子への人物評です。誠に手厳しい批判ですが、これは生産活動に従事しない学者や文人の代表である孔子を批判するときに出された言葉です。であれば「不耕而食、不織而衣」はそのまますぐに「遊民」の定義というわけにはいきません。「不耕而食、不織而衣」は儒者たちが生産的な活動に従事せず消費のみをする存在だとする表現であり、後に非生産者一般の表現になっていったのでしょう。そして一茶の時代には非生産者の代表である「遊民」を指し示すことが社会の通念となったのだと近

世史家の多くが語っています。

いうまでもなく俳諧師を志した一茶は「荘子」と無縁ではありません。俳諧の宗匠として一人前になろうとしたら

⑨　芭蕉翁のすねをかじって夕涼み

一八一三（文化十）年

とあるように俳聖芭蕉の世界を追体験しなければならず、そのために芭蕉翁の足跡をたどり（俳行脚）、芭蕉が傾倒した思想を学ぶことが必須のこととされました。そして、その芭蕉が最も親しくした思想は「荘子」のそれでした。とはいえ芭蕉翁が「荘子」に傾倒したからといって、中国古典の哲学書「荘子」が一茶のコンプレックスに直接に影響したかどうかはよくわかりません。

それよりも注目すべきは十八世紀頃から老荘思想（道家の思想家であった老子と荘子の思想）の解説本（当時は「談義本」といった）がよく流布していたという事実です。「都荘子」「田舎荘子」は通俗教訓的な内容、たとえば「知足安分（足りることを知り、分に安んずること）」といったことを繰り返し言って聞かせるようなことを述べた書物ですが、多くの人に読まれました。先ほど述べた盗跖の話は老荘思想の談義本には必ず紹介されており、かなり知られたエピソードでした。勉強熱心で好奇心のかたまりであったともいえる一茶はこのような談義本を次々と読み、ここから自らを非生産的な存在だ、「不耕」の民だ、「遊民だ」と考えていく上で強い影響を受けたということは十分にありうることです。そして、この意識は一茶の心の中に大きな「おもし」を生み、一茶を生涯にわたって悩ませ迷わせたと考えられます。

四

人々の「遊民」に対する批判的な目は農村社会の危機感の表れであり、「遊民」が知識人らによって大きくクローズアップされたときは幕藩体制を支える農業生産のありようが大きく揺らいだときでもあります。それは「遊民」の増加が食糧の生産と消費のバランスを崩す元凶だと認識されていたからです。すでに十八世紀前期の享保の頃に「遊民は四民（士農工商）の所作をばなさで、国土の米を食らひつぶす者を云ふ」（大月履斎「燕居隅筆」）と言われており、すでに遊民の存在が危険視されていたのですが、その危惧が十八世紀後半以降には現実のものとなってきたのでした。つまり、貧窮に苦しむ農民が増え、田畑を手放し、自分の労働力を売って得た収入で「銭つかい」「買い食い」する貧しい農民が増えて農業に従事する労働力の減少が目立つようになっただけではありません。離農した人々の一部は無宿人となって流浪するか、さもなければ都市に流れ込んで滞留し日雇・棒手振などの「その日暮らし」をする都市下層民となって「遊民」となる者が激増するということとなりました。その問題が多くの人々によって、ゆゆしきこととクローズアップされ始めたのです。

特に農村では農業に従事しない者はすべて「遊民」と同一であると見ていたようです。

この農村の「遊民」、つまり不耕の民が増大することによって米を生産する農民が古来より続いてきた苦労の何倍もの難儀をこうむることになると当時の人々は見ていました。そうしたことから生じた厳しい労働、貧しい生活から逃れて農業以外の収入を得るため、農民たちはますます子ども達を奉公に出すなどして金銭を得ることを志向して離農していき、ついには米作りという農家の正しい道を歩む者がいなくなっていくことになります。

これは米中心の社会であった江戸時代では深刻な問題でした。当時の多くの経世家が警鐘を発しましたが、もうそれは誰も止められない流れでした。そうした世の中を一茶は、その晩年に次の句を詠んでいます。

⑩　日の本や金も子を生む御代の春

一八二五（文政八）年　元旦

「我が日本では金も金の子を生む、ありがたい春になった」という句意です。金が金を生む時代の流れが顕著になり「神の国の日本でも金がすべての国となった。ああ、おめでたいことだね」と聞きようによっては皮肉っぽく読んでいます。しかし、「金」中心の世だと認識すればするほど自分は「不耕而食、不織而衣」であり「遊民」であるという意識を持っていた一茶は複雑な思いを抱いたに違いありません。その点、この⑩の句はいろいろと解釈できて面白い一句です。

五

以上のべてきた「遊民」への見方、そして、故郷に帰り遺産相続で得たいくばくかの田畑の耕作を妻にすべて任せ、自らを「穀つぶしの遊民」と思いながらも句作活動を続けた一茶。その彼がかなりの人間的な苦悩や精神的な葛藤を経て晩年を迎えたであろうことは容易に想像できます。そして一茶が最終的に行き着いた心境を吐露した文章があります。一八二二（文政五）年一月一日、死の五年前に書いた文章です。

御仏は暁の星の光に四十九年の非を悟り給ふとかや、荒凡夫のおのれのごとき、五十九年が間、暗きより暗きに迷ひて、はるかに照らす月影さへ頼む程の力なく、たまたま非を改めんとすれば、暗々然

として（よく分からないままに）盲の書を読み、蹇（けん　足が不自由なこと）の踊らんとするに等しく、ますます迷ひに迷ひを重ねぬ。げにげに諺にいふ通り、愚につける薬もあらざれば、なほ行く末も愚にして、愚の変はらぬ世を経ることを願ふのみ。

「文政句帖」より

一茶は自らを迷いの固まりのような「荒凡夫（「荒凡夫」とは「自由で煩悩のままに生きる平凡な人間」のことだとは俳人の金子兜太氏の解釈です）」といっています。そして、迷いに迷いながらも生き抜いてやるぞ、という人生観を一茶が持ち得ていたことがこの文章から見えます。

もう少し話を前に進めますと、一茶自身がずっと持っていたコンプレックス、つまり自分は「耕ずして喰ひ、織らずして着る」遊民なのだという意識は、それから脱却しようとするのではなく、むしろ「迷ひに迷ひを重ね」ることを自分の生きていく糧とするというしたたかな人間、もっといえば迷いを自分が生きていく上でのパワーの源泉とするたくましい「荒凡夫」へと成長した一茶の心の中で、それはずっと存在し続けたのです。

隠された歴史（５７）

満田　正賢

前回は、渡来人に関する問題の整理をしました。今回は、渡来系氏族が古代において担った役割について具体的にみていきます。

まず、渡来系の二大氏族の一つである東漢（やまとのあや）氏についてです。征夷大将軍となった坂上田村麻呂で有名な坂上氏に伝わる「坂上系図」によれば、東漢氏の祖は「漢高祖帝―石秋王―阿智王―使加使主（つかのおみ）」と記されています。阿智王は日本書紀などには阿知使主（あちのおみ）と記される人物です。漢高祖帝は紀元前三世紀の人物なので、この系図では年代的に合いません。武光誠氏は『渡来人とは何者だったか』（河出書房新社）の中で、雄略紀にある、「天皇が東漢氏の指導者が『使主（おみ）』にかわって『直（あたい）』の姓を与えられた」という記事と、「天皇が大連の大伴室屋と東漢直掬（やまとのあやのあたいつか）の二人に遺言を残した」という記事を重ね合わせると、使加使主と東漢直掬が同一人物であると考えられる、という説を述べています。この説はかなり信憑性の高い説です。又、考古学的調査から渡来系の技術が五世紀末以後になって東漢氏の本拠地である飛鳥南部に広がり始めたと見られる、という点からも、東漢氏の渡来は五世末頃だと考えるのが妥当であろうと思われます。

六世紀後半から七世紀前半に近畿地方を実質的に支配した蘇我氏は、東漢氏と結んで勢力を拡大しました。奈良盆地の後進地であった飛鳥の開発は、実際には東漢氏が担ったと思われます。奈良県高市郡明日香村にあった檜隈（ひのくま）寺は東漢氏の氏寺であったと想定されています。檜隈寺跡のそばにある於美阿志（おみあし）神社の祭神は阿知使主とその妻の二柱です。東漢氏は、今来漢人（いまきのあやひと）、すなわち朝鮮半島からの新しい移住者を取り込み、蘇我氏の勢力拡大に貢献したと思われます。

東漢氏一族として、日本書紀に欽明紀以降天智紀までの期間に記されている人物は、東漢直糠子、東漢坂上直麻呂、東漢直駒（＊蘇我馬子の指示で崇峻天皇を殺した人物）、東漢直磐井、倭漢（＊やまとのあやと読み東漢と同じ氏を表す）福因、倭漢書直縣、倭漢直比羅夫、倭漢文直麻呂、東漢長直阿利麻、東漢草直足嶋、倭漢沙門智由、などです。同じ氏に「東漢」と「倭漢」という違う表記がされていること、東（倭）漢と直（姓）との間に「坂上」「書」「文」「長」「草」などの文字が挿入されているのは、日本書紀編纂時点で各氏族から提出された表記を尊重したからという理由が考えられます。

なお、「書」も「文」も同じく「ふみ」と訓み同じ氏を表しますが、「西文（書＝かわちのあや）」氏は百済人「王仁」を祖とする別系統の氏族です。

東漢氏一族は欽明紀以降ヤマト王権に深く入り込んでいました。ところが天武紀以降「東（倭）漢」の名をもったという人物はいっさい記されていません。天武紀には具体的な人物名は出てきませんが、氏としての東漢氏一族は、天武三年に「連（むらじ）」の姓を与えられ、天武十四年には「忌寸（いみき）」の姓を与えられています。しかし東漢氏一族は、天武期以降その地位を低下させ、奈良時代に入った頃には、朝廷の官僚として活躍する東漢氏一族は、文氏、民氏、坂上氏ぐらいになってしまいました。『東（倭）漢』という名のついた氏族は平安時代に成立した新撰姓氏録には全く記されていません。その理由を探るには天武六年六月の次のような記事にヒントがあるように思います。

「この月東漢直らに詔して『汝たちの族党は、本から七つのよからぬことを犯してきた。そこで小懇田の御代（推古）から近江朝（天智）までつねに汝たちを諮るのを事とした。今、朕の世にあたって、まさに汝たちのよくない状（態）を責め、犯したところに従って（相応に）罪しよう。しかし、なにがなんでも漢直の氏を絶やしたいのではない。それゆえ大きな恩をたれて罪をゆるすこととする。今か

ら以後もし犯す者があれば、かならず（罪して、赦があっても）赦の例にはいれないぞ。』といった。」＊日本書紀の現代語訳は、『原本現代訳日本書紀』山田宗睦訳を使用しています。

この記事が何を意味しているのかは不明です。しかし、「隠された歴史（５４）」で述べたように、天武天皇（大海人皇子）と異父兄弟である漢皇子が同一人物であると仮定すれば、その意味がぼんやりと見えてきます。すなわち天武天皇は、自分に幼少期から深く係わってきた東漢氏一族が、これ以上政権内での影響力を広げるのを牽制したのではないでしょうか。

新撰姓氏録には、東（倭）漢氏は載っていませんが、「坂上大宿禰」の同祖として「檜原宿禰」「内蔵宿禰」「山口宿禰」「平田宿禰」「佐太宿禰」「谷宿禰」「畝傍宿禰」「櫻井宿禰」「路宿禰」「文忌寸」の十氏が載っています。又、「文宿禰」の同祖として、「文忌寸」「武生宿禰」「櫻野首（おびと）：武生宿禰同祖」の三氏が載っています。つまり、「宿禰」という姓（かばね）を取って眺めると、現代において存在する氏姓として拡散していることがわかります。東漢氏の血は多くの日本国民の中に流れていると思われます。

次に、渡来系二大氏族のもう一つの氏族である秦氏について、『謎の渡来人秦氏』水谷千秋（文藝春秋新書）などを参考にして紹介します。

秦氏は日本の古代において最も多くの人口と広い分布をもつ氏族です。桓武天皇によって挙行された二度の遷都に秦氏は大きな役割を果たしたとされます。山背（山城）一帯は秦氏ホームグラウンドでした。秦氏は五世紀後半から末頃には山背に本拠を置き古墳を築きました。秦氏の重要な居地として知られているのは紀伊郡深草と葛野（かどの）郡の嵯峨野一帯です。

秦氏の直接の祖である人物が日本書紀に現れるのは、雄略紀十五年の次のような記事です。

「秦の民を臣、連らに分散して、それぞれ思いのままに使って、秦造には委ねなかった。それで秦造酒（はたのみやつこさか）ははなはだ案じて、天皇に仕えていた。天皇は（酒を）寵愛し、詔して秦の民を集め、秦酒公に賜わった。公はそれでたくさんの勝（すぐり＝下級役人）をひきい、調庸の絹や縑（かとり＝薄く目のつんだ絹布）を奉献して朝廷に充（分）に積みあげた。それによって姓を賜わって禹豆麻佐（うつまさ）といった。」

但し、山尾幸久氏は、『秦酒公』を秦氏の事実上の初代とするのは間違いである。『秦酒公』という名はすこし後のもので元来のものではない。」と述べています。

実在が確実なのは、欽明紀の「秦大津父（おおつち）」の記事が最初です。

「（欽明）天皇の幼時、夢のなかに人があらわれ、『天皇が、秦大津父という者を寵愛すれば、大人になって、かならず天下を（保）有するでしょう』といった。おどろいてめざめ使を遣ってあまねくさがし求め、山背の紀郡の深草（京都市伏見区稲荷町辺）の里から（みつけることが）できた。姓字ははたして夢に見たとおりだった。そこでよろこびが身にあふれ、いままでみたこともない夢だと感じった。話しかけて、『汝はなにかあったか』といった。答えて、『ありません。ただ臣が伊勢に出かけ、商売をしてもどってくると、山で闘いあって血まみれの二狼に出あいました。すぐに馬を下り口や手を洗いすすぎ、請い願って、『汝は貴神であって、荒あらしい行（為）を好む。もし猟師に出あったなら、獲られるのがもっと早いだろう』といいました。そして闘いあうのをおしとどめ、血まみれの毛を拭い洗って、放してやりました。（二匹）とも命を全うさせました。』といった。天皇は『きっとこの報いだったのだ』といった。（大津父を）近侍させ、日に日になにものにもまさって寵（愛）した。大いに富んだ。践祚してから、大蔵省に任命した。」

この記事は実に不可思議な記事です。日本書紀の記述では、欽明天皇は継体天皇と手白香皇后の嫡男で、生まれたときから次期天皇を約束されていたはずです。秦大津父を寵愛しなければ天下を保有できないような環境ではありません。しかし、私が「隠された歴史（２３）などで考察したように、欽明天皇が継体天皇の嫡男ではなく、実際には筑紫に遷都した宣化天皇の嫡男（後期九州王朝）に対して、近畿に残った安閑天皇の子だったとすると、この記事はがぜん真実味を増してきます。欽明天皇（＊実際には蘇我氏を中心にした近畿勢力）は、深草と伊勢の間を馬に乗って商業活動していた秦大津父の財力を借りて、実力を貯えていったのではないかと想像出来ます。

秦氏の功績として最も有名なのは、古代日本における最大規模の河川工事であった「葛野大堰（かどのおおい）」の建設です。秦氏は一族を動員して「葛野大堰」を建設しました。『政本要略』所有の『秦氏本系帳』には、この土木工事が、かつて秦の昭王の行なった、大河を塞ぎ止め、用水路を通した結果、数倍の収穫が上がった土木工事に倣ったものであると記されています。この「葛野大堰」の土木工事の結果、今の嵯峨野一帯が豊かな土地となり、嵐山周辺の絶景が出来上がったと考えられます。

秦氏の中で最も有名な人物が「秦河勝（はたのかわかつ）」です。秦河勝は日本書紀に三回登場します。

第一は、推古紀十一年十一月条です。「皇太子は、諸大夫に語って『我は尊い仏像をもっている。この像をひきとり恭うやしく拝むものはいないか』といった。秦造河勝が進み出て、『臣が拝みます』といった。仏像を受け取って、蜂岡寺を造った。」

第二は、推古十八年十月条です。「（新

羅の）客らが朝廷を拝した。このとき、秦造河勝、土師連菟に命じて、新羅の導者とした。」

第三は、皇極三年七月条です。「葛野の秦造河勝は、民が（大生部多の常世神信仰に）惑わされるのをにくみ、大生部多を打ちすえた。」

『聖徳太子伝暦』などには秦河勝が蘇我物部戦争で活躍した記事が載っていますが、秦河勝が本当に蘇我物部戦争で活躍したかどうかについては疑問を持っている研究者が多いようです。

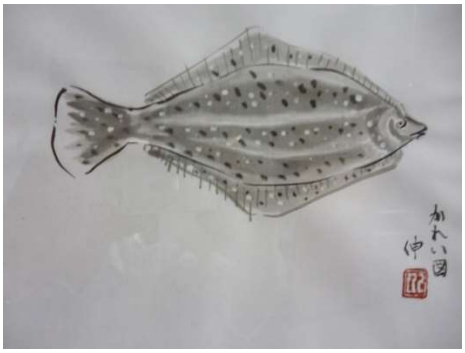
なお、京都の太秦にある「広隆寺」は秦氏の氏寺ですが、水谷千秋氏は、京都の北野にあった「葛野秦寺」と太秦にあった「蜂岡寺」が太秦の地に統合して「広隆寺」となったのだろうと推測しています。そして、広隆寺にある国宝「宝冠弥勒」は推古期三十一年条に「新羅は（中略）仏像一組および金塔と、あわせて舎利を、貢（上）した。（中略）仏像は、葛野の秦寺に置き（中略）」と記された仏像であり、推古十一年に聖徳太子から賜わった仏像は広隆寺にあるもう一つの「泣き弥勒」であろうと推測しています。

秦氏は東漢氏と違い、秦河勝以降意識的に政治の前面との距離を置き、自重して山背の開発に専念していたように見られます。又、山背だけでなく、五世紀以降、各地域に新しく入植していった傾向も見られます。例えば、大阪府池田市の全域は、かつて秦上郷と秦下郷と呼ばれていました。四世紀の後半以降大きな古墳が造られなくなり空白地帯となっていたと見られるこの地に、五世紀末に進出した新興勢力が秦氏であろうと考えられています。勢力交代は猪名川流域全体にわたる勢力交代だったと思われます。

天武天皇系の皇統が孝謙（称徳）天皇で途絶え、皇統が天智天皇の孫の光仁天皇に移りました。しかしそれは、もともと光仁天皇が聖武天皇の娘の井上内親王の夫であったことが理由でした。光仁天皇の息子の他戸（おさべ）親王は聖武天皇の孫でした。ところが、光仁天皇は即位後に突如井上内親王を大逆の罪で逮捕し、井上内親王から皇后の地位を、他戸親王から皇太子の地位を剥奪しました。そして百済系氏族である高野新笠を母に持つ山辺親王（後の桓武天皇）を皇太子に据えたのです。桓武天皇はそのような経緯からか、渡来系氏族を多く登用しています。秦氏が自らの本拠地である長岡京と平城京の建設に全面的に協力していたのは間違いありません。桓武天皇が遷都した長岡京を築いた「秦忌寸足長」は宮城を築いた功績により、延暦三年に従五位を授けられ「主計頭」に任じられています。平安京の造宮職の長官を務めた藤原小里麻呂は秦嶋麻呂の娘婿です。「この平安京の大内裏のあったところが、もとの秦河勝の邸宅のあったところである。」という伝承も伝えられています。

桓武朝では外戚である和（やまと＝高野）氏や百済王（こにきし）氏、坂上氏など多くの渡来系氏族が異例の昇進をとげていますが、不思議なことに秦氏から抜擢された人物がいません。水谷千秋氏は、その理由を「政治の前面に出ないという彼等の禁欲主義?によるものか。」と推測しています。

その他、『謎の渡来人秦氏』水谷千秋（文藝春秋新書）には多くの興味深いトピックスが載っていますが、一つだけ紹介しておきます。それは、日本の代表的な伝統芸能である「能」に関するものです。世阿弥の記した『風姿花伝』は、「世阿弥の元の名は秦元清といった。能楽は聖徳太子が秦河勝に『六十六番の物まね』を命じたところから始まる」と伝えています。その背景には、当代の『金春（こんぱる）』に至る秦氏代々の家芸として申楽を捉える考え方があります。渡来系氏族が日本の歴史に果たした役割を象徴するようなトピックスであると思います。



「道をゆく」四一　江戸

成瀬和之

「女芭蕉の心意気　桑原久子の旅日記から」（九）

四月一一日、久子さん達は、いよいよ草加から千住を経て江戸に入ります。

歌人の宅子さんとしては、このあたりを流れる隅田川なる歌枕を目にした時、深い感慨を覚えたでことしょう。隅田川は武蔵の国と下総の国の境（今の、東京都と千葉県の境）です。

宅子さんは詠みます。

「おもひ出（いづ）るむかしは遠しみやこ鳥　われは筑紫の事をとはばや」　宅子

久子さんも詠みます。

「我にけふすみだがはらのみやこどり　みやこのことをとはばいかに

せむ」　　久子

（私に今日隅田川の都鳥がみられたら、都のことを問うたらどうでしょう）

これの歌は『伊勢物語』の在原業平の歌の本歌取りです。業平一行は隅田川を渡ろうとして、ここを超えれば更に都は遠くなると懐郷の思いに打ちひしがれます。すると渡守が無情にも、早く乗れ、日が暮れると促します。みな、都に残した人もあれば侘しさは限りありません。

ここからは『伊勢物語』九段―三「東下り」の坂口由美子さんによる現代語訳を引用します。

ちょうどそんな折も折、白い鳥で、くちばしと脚（あし）とが赤い、鴫（しぎ）くらいの大きさの鳥が、水の上で遊び遊びしながら魚を食べています。京では見ない鳥なので、そこにいる者は誰も知りません。渡し守に尋ねたところ、「これがそれ、都鳥（＝ゆりかもめ）だ」と言うのを聞いて、

都鳥という名前を持っているのならば、さあ、問うてみよう、都鳥よ、私の思うあの女は、無事でいるのかどうかと。

と昔男（むかしをとこ）が詠んだので、舟中の者は、皆そろって泣いてしまったのでした。

『伊勢物語』は、「男」の元服の日から始まり、死に臨んでの歌で終わる、全一二五段によって構成される短編連作歌物語集の傑作です。

実はこの作品、成立年代も作者も不詳です。在原業平と縁のある人によって、『古今和歌集』が成立した九〇五年以前に原型が書かれ、その後増補され、『源氏物語』ですでにその名前が書かれているので、平安時代の一〇世紀後半には成立していたと考えられます。おそらく、元々あった物語に様々な人が手を加えていったのでしょう。一三世紀、百人一首の選者としても知られる歌人の藤原定家が、現在にまで残る一二五段の形にまとめました。

在原業平は、平城天皇の皇孫として生まれましたが、藤原氏全盛へと向かう時代に、藤原氏への反発から権力争いに距離を置き、和歌や恋に生き、平安のみやびを体現しました。

在原業平と言えば「稀代のプレーボーイ」だと思われている方も多いでしょう。『源氏物語』の光源氏も業平がモデルになったと思われますし、井原西鶴の『好色一代男』にも影響を及ぼしていると考えられます。

しかし、ほんとうは、情が厚く、先入観を持たずに人を見るため、いろいろな女性と通じ合い巻き込まれていった、「女に圧倒された男」だったのではないでしょうか？

有名な「東下り」の段（第九段）の杜若（かきつばた）の一節を見ていきましょう。

「むかし男ありけり。その男、身を要なきものに思いなして、京にはあらじ、あずまの方に住むべき国求めにとて、行きけり。」と始まります。

「俺はこの世には、もう用のない人間なのだ。もう京には住むまい」と心に決めて、当時としては人跡未踏の地にも等しい東国への旅に「男」は出たのです。

彼をそうまでさせたもの、それは許されざる恋でした。

相手の名は『伊勢物語』本文では明らかにされていませんが、当時の読者にとっては、それが藤原高子（ふじわらのたかいこ）であるのは周知のことでした。高子との逃避行すらも含むスキャンダル。

ちなみに、その逃避行の先で、高子の兄たち（藤原基経・国経）に発見され、連れ戻された場所が「芥川（あくたがわ）」でした。芥川は大阪府高槻市にある実在の川で、この文章を連載している「芥川だより」の「芥川」なのです。

そのスキャンダルはただのスキャンダルではありません。高子は、清和天皇の后（二条后（にじょうのきさき））となった女性なのです。これが現代の話だったらどうなるでしょう？「天皇の后に決まったあの女性の赤裸々な過去」などと週刊誌は書くのでしょうか？　怖くて「自主規制」することにもなりかねない大スキャンダルです。

しかし、それだけではありません。高子は藤原の「北家」の息女です。それに対して、業平と関係が深いのは同じ藤原でも、「式家」のほうなのです。業平と高子は「ロミオとジュリエット」よりも悲劇的な恋人同士だったのです。ロミオは自死に至りましたが、「もう死んでしまいたい」と思うほどの傷ついた心を抱えて、業平は旅に出たのです。

韻文と散文の違いを表す実例を見ましょう。『伊勢物語』の「東下り」の一節、隅田川の場面です。現代語訳だけでなく、今度は原文でリズムを味わってください。

（原文）

なほ行き行きて、武蔵（むさし）の国と下総（しもふさ）の国との中に、いと大きなる河あり。

それを隅田河といふ。その河のほとりに群（む）れゐて、

「思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかな。」と、

わび合へるに、渡守（わたしもり）、

「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。

さる折（おり）しも、白き鳥の、嘴（はし）と脚と赤き、鴫（しぎ）の大きさなる、水の上に遊びつつ魚（いを）を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。

渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」

と言ふを聞きて、
名にし負はばいざこと問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしや
と詠（よ）めりければ、舟こぞりて泣きにけり。
（『伊勢物語』角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典より）

ここで物語をつづる地の文は散文、「名にし負はば」の和歌が韻文です。韻文の和歌は散文の地の文の間にあって、五・七・五・七・七の音楽を奏でています。

これと対比して、次は俳句に目を向けます。『おくのほそ道』（松尾芭蕉）の同じ隅田川の場面です。松尾芭蕉と曾良は深川から舟で隅田川をさかのぼり、千住で舟を降ります。ここで見送りの人々と別れを惜しむ一節です。

（原文）
千住（せんじゅ）といふ所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷（ちまた）に離別の涙をそそぐ。
行く春や鳥啼き魚の目は涙
これを矢立（やたて）の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影（うしろかげ）の見ゆるまではと、見送るなるべし。

（現代語訳）
千住（東京都足立区）という宿場で船から下りると、これからのはるかな旅路を思って、胸にこみあげるものがあり、この世は夢・幻のようにはかなく、別れの涙など無用だと知りながらも、別れを惜しんで涙を流し合った。
行く春や鳥啼（な）き魚の目は涙
（過ぎゆく春を惜しんで、人間ならぬ鳥までも鳴き、魚の目は涙でうるむ。今、旅に出る私どもを囲み、みんなで別れを惜しんでくれた。季語――行く春）

これを旅の句の最初として出発したのだが、名残惜しさになかなか足が前に進まない。道の途中にみんな立ち並んで、私たちの後ろ姿が見えなくなるまでは、と見送っているようだった。
（『おくのほそ道』（全）角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典より）

なお、見送りをした杉風（さんぷう）は魚屋でした。だから「魚の目は涙」なのです。

和歌と俳句の違いがあるだけで、ここでも韻文の俳句が地の文の間で五・七・五の音楽を奏でています。

『伊勢物語』の和歌も『おくのほそ道』の俳句も、地の文という野原にそびえる音楽の塔のようではないでしょうか。この二つの例からわかるように、散文（地の文）は物語をつづります。これに対して、韻文（和歌や俳句）は音楽を奏でます。

長谷川櫂さんの『一億人の俳句入門』で、韻文と散文、言葉と音楽についてわかりやすく解説しています。その要旨を紹介します。

言葉はまず音であるから、すべての言葉、そして、言葉で織りあげるすべてのものは、詩も文章も音楽を奏でる。ところが、この言葉の織物、これを「文」と呼べば、文の種類によって音楽を大事にするものとそうでないものがある。言葉の音楽を大事にして織るのが韻文（いんぶん）、音楽よりも意味を大事にして織るのが散文（さんぶん）である。

韻文は詩や短歌、俳句、謡や歌舞伎のせりふなどである。韻文にはリズムがあり、音色があり、リズムと音色が織りなす調べがある。音楽を奏でる一連の言葉が韻文なのだ。

これに対して、散文は、私たちが毎日、目にしている新聞の記事、手紙やメール、小説や論文など、あくまで意味を正確に伝えることが散文の目的である。

和歌と俳句の違いがあるだけで、同じ「韻文と散文」、「言葉と音楽」の組み合わせに違いありません。

この本の題を『女芭蕉の心意気』としました。桑原久子さんは歌人だから『女西行の心意気』でもよさそうです。しかし、和歌と俳句の違いはあれ、同じ「散文と韻文」で構成されているのですし、旅人としてのインパクトは、やはり、松尾芭蕉でしょう。私は『我が奥の細道の旅』という前作を書いていることもあり、芭蕉の方が親しみやすいので『女芭蕉の・・・』となった次第です。さらに、江戸後期の商家の女主人で歌人たちのエネルギーとたくましさを示す題として『女芭蕉の心意気』がふさわしいと考えたのです。

桑原久子さんは、最初の方で紹介した次の隅田川の歌で『二荒詣日記』の上巻を結んでいます。

「我にけふすみだがはらのみやこどり みやこのことをとはばいかにせむ」 久子

久子さんは『伊勢物語』のこの歌を上巻の結びにふさわしいと考えたのでしょう。

実は、私も高校時代の国語の授業で強く印象づけられた古典に『伊勢物語』がありました。

「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の歌は「むかし男ありけり。その男、身を要なきものに思いなして」で始まる「東下り」の冒頭とともに、なぜか強く心惹かれました。そのことが私の心に蘇ってきました。

俳句

影山　武司

街道を逸れて脇道ほととぎす
手拭をひたして頬に山清水
鬼ごつこ鬼は末つ子夏野かな
両の手を翼に広げ青田風
海の香の押し出されくる心太
夏空へ響くジョツキの音軽し
伊良湖崎青の犇めく夏の海
水が水押し上げてをり噴水の空
万緑へ深く息して一歩かな
神官の声が先ゆく茅の輪かな

編集後記

SK生

▼梅雨前線による豪雨、そして猛暑。まだ夏の入り口だというのに堪えられない暑さだ。暑さ負けをしたというわけでもないのだが、出発したばかりのショートショートのコーナーは筆者の都合により今回お休みとなった。楽しみにしていた読者の皆さんには一言お詫びを申し上げる。　▼色鉛筆画をやっている知人から植物の緑を塗るときに色鉛筆の緑色を使ってはいけないと聞いたことがある。黄色に青色を重ねて描くのだそうである。人工の緑色では自然の中に存在するあの生き生きとした緑は描くことはできないのだ。同じようなことを最近になって文化勲章受章者で染織家の志村ふくみさんの話で知った。草木染めでは緑という色を出せないそうである。自然にはあふれるほど緑があるのに、である。緑の葉を絞った緑色の液はしばらくすると色を失って灰色となる。もちろん、それで染めても決して緑にはならない。刈安（かりやす）や梔子（くちなし）などの植物で黄色に染めた糸を染料である藍の汁をためた藍甕につけて初めて緑色の糸ができあがるのだそうだ。しかも藍甕の中で棒で絞り上げた後、力を抜くと空気に触れた糸がエメラルドグリーンに一瞬だが輝くように見えるという。こうした体験から志村さんは他の色は「染まる」というが、緑色だけは「生まれる」と言いたくなるといっている。二つの草木の色が合わさって新たな色が生まれるのだ。緑色の糸は草木の緑から生まれるのではない。それは硬直化した認識・考え方だったのである。　▼一つの考えに執着し硬直したとらえ方ではついに良い結果は得られない。今、目前にある現実がすべてではなく、もっと違った道があるかも知れないと考えることが大事。これも志村さんの話の中にある言葉。志村さんは今年九十八歳。草木染めと紬織に六十年以上従事してきた人の言葉は深く、そしてステキだ。

蓮の花

黄金鬼百合

アガパンサス

京都府立植物園にて撮影

川柳を読む ②

今月はどんな句に出会えるか。そしてまた私は何を思うだろうか。詠んでなんぼ、読まれてなんぼ。それが川柳です。

難題があっさり解けて拍子抜け
幹夫

どんな難題があり、どうしてあっさり解けたのだろう。拍子抜けしたと言われても分からないけれど、読み手の思いは、ああだろうか、こうだろうかと我が身を振り返り拡がる。しかし、この句で思い出した句があります。

考えを直せばふっと出る笑い

わが故郷（の近く）松山市の番傘柳人・前田伍健（一八八九―一九六〇）の句です。「昭和二十年七月二十六日深夜に松山市を襲ったB29による爆撃で、市街地の大半は焦土と化した。この時、失意の市民を救ったのが前田伍健のこの句だった」と言い伝えられる句です。

生きているだけで誰かの役に立ち
光生

「そこにいたそれだけでいいそんな人」は誰のまわりにもきっといる。

「雨ニモマケズ」とうたった宮沢賢治は、「ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／ソウイウモノニ／ワタシハナリタイ」と言いました。

「何かの役に立つ勉強を怠けてはいけない」、これは津軽の農民画家・常田健さんの言葉。土蔵の中に２００枚の農民画を残していたが、農民の暮らしに迫ったその絵を誰に見せるでもなかったという。

ガガーリン地球は青いままですか
正彦

ガガーリンは、昭和三十六年四月十二日、カザフスタンの基地からソ連の宇宙船「ボストーク1号」に乗り、人類初となる地球一周一〇八分の宇宙飛行を行った。「地球は青かった」と本当に言ったかどうか。いずれにしても彼は、人類で初めて青い丸い地球を見た人であった。

その頃の日本は高度経済成長をめざし所得倍増計画に突入する時代。子どもたちは、マンガ『少年』に連載中の十万馬力で空を飛ぶ「鉄腕アトム」に希望を託していた。それから五十年、東日本大震災で福島はフクシマになった。そして今、温暖化による異常気象はとどまるところを知らず、ウクライナには戦争がある。評すれば切りなし、ただ返句を送るのみ。

温暖化も戦も変えぬ水の青

丸くなれ思う心のカド捜す
敦

今は昔、単身赴任先から帰る電車で出会ったお婆さんに、人は何を捨ててこんなに丸くなるのだろうと思ったことがあった。それでも私は、「方円の器に従うという水に　憧れていて角は取らない」と歌を詠んでいた。

この句は、もっと「丸くなれ」と詠いながら、しかしそう思う私の心に「カド」はないのか、あるとすればどんなカドだろうかと詠う実感句です。そう言えば、小椋佳も歌っていたなあ。

♪一日ずっといらついたのは　思いがけなくある人に　穏やかな人と言われたりして♪

そして今、「方円の器に従う」水の精神を教えてくれるのは、ブルース・リーの「水になれ」という言葉。

「型を取り去れ、型を捨てろ、水のように。水はカップに注げばカップの形になり、ボトルに注げばボトルに…。水は流れることも砕くこともできる。水になれ、友よ！」

二〇〇万を越えたあの香港の民主化デモの中にもこの言葉は記されていた。

「Be Water, My Friends !」
「滴水穿石」

勝者の数と敗者の数は同じ数
恭正

「世の中は誰かが勝てば誰か負け」です。世間の目は勝者だけに向けられがちですが、同じ数だけ敗者がいると詠んだ句です。実際には、一人の勝者の背後には無数の敗者がいる。勝者は圧倒的に少数であり、敗者は圧倒的に多数です。

この句から飛躍して言えば、人間が生きる幸せは何であるか。不幸を生む世の中のからくりはどうなっているか。それは、敗者に向ける目をとおしてしか理解することはできないのかもしれません。敗者への想像力だけが世界を救う、そういう時代が来ています。